一

夕暮れどき、江戸は両国西広小路の一角、米沢町で両替商を営む今津屋の店先に、豊後小倉藩のお仕着せの長半纏を着た小者が訪れ、

「老分の由蔵さんはおられますかい」

と声をかけた。小者は肩に文箱を担いでいた。

由蔵が顔を上げると、

「豊前小倉藩の御雇船が本日、江戸沖に到着しましたのさ。その船に今津屋の老分由蔵さんに宛てた書状が載ってましたんで、御用人佐野様がこちらに届けるようにわっしに命じられましてねえ」

「小笠原様の御顧船に手紙がな」

と言いながら帳場格子の中から上がりかまちまで立ってきた由蔵に小者に、文箱の紐を解き、分厚い書状を出した。

確かに表書きは今津屋老分由蔵様とあった。

「それはそれはご苦労に存じました。御用人の佐野様によしなにお伝えくだされ」

由蔵の言葉に頷いた小者から出ていった。

手紙に注意を戻した由蔵が裏を返して差出人を見届け、奥へと入っていった。

この日、主の吉右衛門は、他用で外に出ていた。

由蔵が向かったのは奥向きの女中おこんのいる座敷だ。

おこんは縁側に座布団を敷いて、夕暮れの淡い光の中で縫い物をしていた。

「おこんさん、ようやく居眠りどのから手紙がとどきましたぞ」

糸切り歯に糸をあてていたおこんが糸を外して、

「江戸の方々をやきもきさせて、ほんとに糸の切れた凧なんだから」

とぼやいた。

おこんがよしぞうのために縁側に座布団を運んできた。

「えらく分厚い手紙と思ったら、四通も手紙が入っておる」

封を切った由蔵がおこんに見せた。

今津屋宛ての他に品川柳次郎、鰻屋の宮戸川の鉄五郎親方、そして、おこんの父親の金兵衛に宛てた手紙が入っていた。

由蔵が、今津屋由蔵、おこんと併記された手紙を開き、おこんに読んで聞かせるように声を張り上げた。

「なになに、西国九州にも秋の気配が忍び寄り、朝晩は冷え込むようになりましたが、皆々様にはお変わりなくお過ごしのこと拝察いたします。まず、連絡が遅くれましたこと、深くお詫び申し上げます。江戸を発つ時、三月の留守と思案して国表に参りましたが、約定を守れそうにございませぬゆえ、書状にて事情を説明致します……」

「やっぱり、坂崎さんは関前藩に帰参したんですね」

由蔵が続けた。

「……国家老の専断に始まる藩の騒動は、藩公不在なれど上意の助けを借りて裁きが開かれ、守旧派の面々の悪事、失政が糾弾され、中心人物の国家老の切腹にて一応の決着はつきました。さて、それがしの許婚の奈緒どののことにございますが、奈緒どのは、切腹した国家老の謀略にて兄小林琴平を失い改易された、小林家の妹娘にございます。それがしは奈緒どのの心中を考え、もはや、所帯など持てることなどあらんとそのままにして城下を立ち去った経緯がございます。その後、奈緒どのは、家族の不運を一身に担って生きて参りました。ですが、女の身一つで病に倒れた父親を抱え、その治療代、生計の金もままならず、ついには苦界に身を投じる決心をしたのでございます……」

驚きの顔で由蔵がおこんを見た。

「なんということ……」

先を読みますぞと由蔵が手紙に目を戻した。

「奈緒どのは自ら関前城下の遊女屋に出向いて身売りの相談をなし、女将と女衒との話し合いの上に肥前長崎の遊里丸山に身を沈めたのです。奈緒どのに過酷の宿命を背負わせたのはこれ偏にそれがしの責任にございます。祝言を明日に控えて暗転した人生を奈緒どのがかようにも考えていようとは、迂闊にもそれがし、考えが至りませんでした。奈緒どのの兄を斬った後悔のみに思い迷っていた己れの考えの至らなさを恥じております……」

おこんにも由蔵にも磐音の苦悩が伝わってきた。

「それがしに残された途はただ一つ、奈緒どのを苦界から救う、そのことにございます。ですが、長崎に参ってみると一足違いにて豊前小倉に移っておったのでございます。この手紙は、小倉城下の旅籠に認めております。すでに奈緒どのは何百金も値がつく身、それがしの才覚ではいかんともし難いものにございます。しかし、なんとしても奈緒どのを苦界からすくいたく、ない知恵を絞って策っを立てる所存。とにもかくにも一目なりとも奈緒どのに会うことが先決かと考えております。かような仕儀にて、江戸への帰着が恐れております。主の吉右衛門様、老分由蔵、おこん様、皆々様、それがしは、豊後関前藩に戻る考えはさらさらなく、今は奈緒どのの救出に専念いたしたく、事情をお察しの上、江戸帰府遅延をお許しのほどお願い申し上げます」

「坂崎さんの身辺にはいつも風雲が立ち込めてますな」

複雑な表情を顔に漂わせて由蔵が呟く。

（なんとう男だろう）

おこんは奈緒の決心と磐音の切なさを思って瞼が潤んだ。

「おこんさん、そなたに追伸がる……おこん様、かような次第です。同封の三通、それぞれの宛先にお届けくだされたくお願い申し上げます、じゃと」

「今晩にも届けに参ります」

涙を拭ったおこんが答えた。

「品川様も三日にあげず、手紙は来ぬか、なにか連絡はないかと顔を見せられますからなあ。おこんさん、どうせ皮を渡るんだ。今日はいえに泊まってくるがいい」

「どてらの金兵衛さんも、坂崎さんがいなくなって寂しそうだもんね」

自分の父親をおこんはこう呼ぶと、

「なら、早速仕度にかかります」

と針仕事を片付け始めた。

京の丹波口から長門国に抜ける山陰路には秋の気配が濃く漂っていた。

この日の昼下がり、坂崎磐音は、山陰道を外れて今市宿から出雲へ入ろうとしていた。

赤間関を出て長府を抜ける北道筋から深川で北裏街道に入り、毛利氏の三十七万石の城下町の萩へ抜けた。

磐音は京へ辿る道に山陰道を選んだ。

さして理由はない。

磐音の立ち騒ぐ胸のうちが、なぜか秋の光を浴びて海岸に高波を押し寄せる海の道を選ばせたのだ。

浜田、石見と、刻々と変化する光に様相を変えていく海の色を見ながら、旅をしてきた。

豊後関前の、両腕を差し伸べられたような岬二つに囲まれた、穏やかな内海とは異なり、荒々しく猛々しかった。

それが今の磐音の胸を魅了した。

急ぎ旅の磐音が回り道をして出雲大社に参拝しようとしたのは、偏に奈緒の無事を八百万の神に願いたかったからだ。

今市から出雲大社までは、二里八丁（およそ八・八キロ）ある。

鄙びた脇道を北西に向かって、磐音は神が生きる里へと足を運んだ。

陰暦十月は神無月ともいう。

だが神々が集まる出雲にかぎっては、神在月というのである。

神の故郷の出雲大社は、古の昔にも高さ三十に丈（およそ九十六メートル）の壮大な、高櫓の神殿が天に聳えていたという。

八雲山の南麓に鎮座する出雲大社の本殿は大社造り、延享元年に造り変えられたものだ。

磐音は、大社造りの屋根も荘厳な本殿に詣でると、奈緒の健康を祈願した。そして、再会を願った。

磐音は、三人んどうを足早に歩きつつ、道端に見かけた寺社仏閣には足を止めて、奈緒の無事を祈ってきた。

（これでよし……）

と清々しい気持ちになった磐音は山陰道に戻った。

出雲平野の中心の宿場、今市から宍道に向かう。

つるべ落としの秋の陽が磐音の背に回った。

斐伊皮の川渡しに間に合えばよいがと、心配しつつ足を速めた。

『古事記』の八岐の大蛇退治の川である。

高天原を追われたスサノオノミコトが出雲の簸川で十拳剣を振るって頭が八つ、尾が八つの大蛇を退治した。この大蛇から流れた血が出雲のを、簸河を垢に染めたという。

磐音が目にする斐伊川はあｍさに夕日に染まって、伝説の大蛇がのたうつように海へと向かっていた。

磐音はなんとか最後の川渡しに間に合った。

陽光がさらに西に傾き、光が赤みを増した。するとあたりの光景はいっそう神秘なものに染め替えられた。

朱に染まった川を、一日の旅に憑かれた人々や野良帰りの百姓衆を乗せてゆっくりと進んでいく。

だれもが無言なのは、疲れのせいばかりではあるまい。神に抱かれた幻想が沈黙を強いていたのだ。

磐音は荘厳なきもちに浸かりながら、ふと船客の一人に目がいった。

武者修行の若者か、西日を受けた細面は端整であった。年は磐音よりも五つほど若く見えた。

磐音を惹き付けたのは暗くしずんだ双眸だった。虚無に彩られた瞳に豪胆な意思を感じた。

船が宍道宿側の岸辺に着いた。

渡しが最後と知らぬのか、船着場に武家の男女が船を待つ風情で立っていた。

船客がぞろぞろと降りるのとは反対に、二人は船に向かってきた。

二十六、七歳と見える男は、道中羽織に道中袴、女は二つ三つ年上だろう、埃よけの浴衣を羽織って、杖をついた旅姿だ。

無表情の二人の面貌に旅に疲れた様子が見えた。

降りてきた船客たちとすれ違ったとき、女が叫んだ。

「そなたは、田野倉源八、ここで会うたが百年目、妹の仇、成敗してくれる！」

杖を投げ捨てた女が叫びかけたのは、磐音が武者修行の旅とみた若者だった。

女の連れもきっとした視線をその若者に向け、

「義姉上、確かに元今治藩の御小姓組、田野倉源八、女房のお耀の仇、亭主の小田嶋参次郎が成敗してくれる」

男も名乗りかけると、

「義姉上、油断めさるな。田野倉は、土州流居合いの名手にございますぞ」

「参次郎どの、心得た」

船客たちがさっと散って、三人を囲む輪を作った。

仇討だ。

陽に焼けた道中羽織を脱ぎ捨てた小田嶋参次郎は、剣を抜いた。

五尺八寸の均整のとれた体付きで腰もしっかりと据わっていた。

義姉上と呼ばれた女も浴衣も道中衣も脱ぎ捨て、肩に背負っていた荷から小太刀を掴んだ。

「皆様に申しあげます。われら、伊代今治藩松平壱岐守家臣にございます。この田野倉げんぱちは、ここにおります小田嶋参次郎の女房、私の妹のお耀に懸想し、今から三年前の夏祭りの宵にお耀を騙して屋敷より呼び出し、近くの破れ寺で手籠めにした上に縊り殺した鬼畜にございます。偶然にも山門を出たところを家中の者に見られ、泡を食って城下を逐電いたしました。われら、武家の倣いにより藩の仇討ち御免状を頂、仇討の旅に出て三年、ようやく宿願を遂げるときが参りました。仔細はかくのとおり、お見届けを申しあげます」

女が滔々と仇討の仔細を申し述べるのを、田野倉源八の顔色も替えずに聞いていた。

「よう言いなはった。わてがついてます、しっかりと仇をうちなはれ」

大阪から山陰路に来たと思える大店の番頭風の男が応じた。

「いざ、田野倉現パ陽、尋常の勝負！」

小田嶋が叫びかけて、剣を正眼に構えた。

義姉も小太刀の切っ先を胸の高さに突き出すように差し出した。

両者の間合いは三間。

西を振り向いた源八を頂点に左に参次郎が、右に義姉が位置をとり、二対一で向き合っていた。

磐音は、田野倉に注視した。

五尺六寸程の背丈ながら、か細いほど痩身だ。

腰に差した赤糸巻、透鍔、朱鞘も細身に造られていた。

「ありゃ、怯えておるで。口もようきけんし、身体も動かんわ」

先ほど声をかけた番頭風の男が連れの男に囁きかけた。

「それと比べてみなはれ、小田参次郎様の落ち着き払った様子。仇討はなったも同前だっせ」

「わては義姉様も小太刀の名手と見ましたで」

「旅の最後でえらい見物やで」

見物の期待をよそに源八はゆっくりと羽織のひもを片手で解いた。だが、脱ぐ様子は見せなかった。

そうしておいて、左手を鍔元に軽くかけ、利き腕の右はだらりと垂らした。

山の端にかかった西日が正面から源八を照らしつけた。

赤みを帯びた光のせいか、源八の顔がわずかに紅潮してきた。

「参次郎どの」

と叫んだ義姉が小太刀を水平に寝かせ、突っ込んだ。

小田嶋参次郎も正眼の剣を引き付けて走った。

源八の腰が沈んだ。

その源八に向かって左右からつきと袈裟斬りが襲ってきた。

源八が動いた。

体勢を伸び上がらせながら、義姉の突進してくる外へと走り抜けた。

磐音は見ていた。

握り拳を造ってだらりと垂らしていた右手が腹前を横に流れて紅糸巻の柄に掛かると左指が透鍔を弾き、細身の剣を抜き上げた。

刃に西日があたって赤い光の流れを生み出し、義姉の腰から胸を深々と断ち切ると、闘争の間の外にいったん身を逃した。

義姉が悲鳴を上げながら河原に突っ伏した。

磐音の隣に立つ番頭風の男と連れが、

「ああっ、あきまへん」

「あんちゅうこっちゃ」

と思わず声を洩らした。

源八は反転した。

小田嶋参次郎は義姉が打倒されたことに動揺しながらも、すぐに体勢を整えなおした。

「源八、居合いは一度鞘から抜けば、もはや役立たずじゃ」

参次郎は身幅の厚い剣を八双にとった。

居合いの名手の源八は、血に濡れた細身の剣を中段につけた。西日を受けるのは小田嶋参次郎だ。

だが、その陽光も弱々しいものに変わり、今や山の端にわずかに残っているだけだ。

その光がすうっと沈み、一瞬、斐伊川河原が闇の色を深めた。

「源八、お耀の騙っき、思い知れ！」

参次郎が走った。

源八は、中段の剣を手元に引き付けると水平に寝かせ、突進した。

源八の下から突き上げるような攻撃が、参次郎の八双の傾れくる刃風を寸余に躱し、喉を突き破って、血が日没の残照に染まって散った。

ぐううっ

参次郎が足をもつれさせ、河原に倒れ込んだとき、田野倉源八は街道へと走りあがり、薄闇に溶け込むように消えていた。

その後、磐音は、鳥取城下で源八の姿を見かけることになる。

追っ手を返り討ちにした田野倉源八は磐音と同じ街道を、後になり先になりして歩いているようだ。

磐音は見かける度に痩身に秘めた剣技の凄みを思い出していた。